



新年度の発足に際して

日本熱測定学会会長
中央大学理工学部教授 高橋洋一

多事多端であった1997年度を、超人的な熱意と努力で切り抜け、学会運営を再びレールの上に戻していただいた前年度幹事会のあとを受けて、昨年10月より本年度幹事会の活動が始まっている。例年、新幹事の方々は、会誌のうしろの方の総会報告にお名前がのせられるだけで、その実質的な活動と責任の重さを考えると、もう少し前面に出て来ていただいた方がよいのではないか、とつねづね感じていたところなので、この場を借りて別記のようにメンバー紹介をさせていただく。

例年のように、本年度も新年早々の1月10日・11日の週末に、1泊の泊り込みで幹事会・編集委員会が開催され、ナイト・セッションを含めて本学会の当面する課題、将来への展開について徹底的な検討・討論を行った。詳細は庶務幹事より報告（幹事会のページを参照）があると思うので、ここではそのうちの2、3の点について、私見を含め記しておきたい。

昨秋、「熱測定Vol.24, No.5」として、英文特別号が発刊された。この号自体には格別の説明もつけられてはなかったのですが、事情がよくわからなかった方もあろうか、と思われるが、その経緯はその前のNo.3の「幹事会のページ」(24(3), 150)に詳述されているので、ここでは繰り返さない。要は国際化に対応しての日本からの情報発信、と位置付けられるもので、本年度も編集委員会としては同様な英文特別号を刊行したい、と考えている。これについては、海外へのある部数の無料配布を前提としての計画であり、予算措置を伴うことでもあるので、会員諸氏へのサービス還元、とういう観点も含めて、将来にどのような展望を持って対処すべきか、慎重に考えていくつもりで、会員の意向・評価をぜひ伺いたいと考えている。アンケートの実施も計画されているので、ご協力をお願いしたい。なお、これに関連して「幹事会のページ」は会誌の巻頭に持って来るべきではないか、と個人的には考えている。編集委員会のご一考をお願いしたい。

もうひとつは、学会の財政基盤についてである。1995年頃より顕在化した学会の赤字基調の解消については、昨年度幹事諸氏の真に献身的な努力により、昨年度末ですでに黒字に転じている。ひとつには会費未納の幽霊会員の解消につとめたこともあるが、熱測定講習会などを積極的に推進して事業収入の拡大につとめた成果と言える。大変ありがたいことであるが、私としては万が一にも一部の幹事や事務局の負担に無理のないよう、お願いしたいと思っている。今年度も講習会・ワークショップなどはいろいろに計画されているので、会員諸氏の積極的なご協力をお願いしたい。

横浜での第34回熱測定討論会（10月28日～30日）も順調に準備がすすめられているようである。また、1995年の第35回は東京大学工学部 山脇教授にお世話願ひ、東京で開催することに内定した。

本年度の学会の一層の発展を心より祈念したい。

1998年度日本熱測定学会幹事会メンバー

会計幹事	○小棹理子 (ソニー湘北短大) 三橋武文 (無機材研)
庶務幹事	○齋藤一弥 (阪大理) 吉田博久 (都立大工)
編集幹事	○高橋克忠 (阪府大農) ○八田一郎 (名大工)
企画幹事	○稲場秀明 (千葉大教育) ○古賀信吉 (広島大教育) 塩坪聰子 (大阪女学園短大) 西本右子 (神奈川大理)

○印は1998年度・1999年度幹事

学会ホームページ <http://www.indchem.metro-u.ac.jp/jpscta>